

英語科教職課程を履修する大学生の 英語観に関する一考察 —2021～2023の追跡調査より—

川崎つぶら¹・内田翔大²

1 はじめに

1.1 問題の所在

“Sometimes I have had a teacher correct me and say I'm pronouncing something wrong or say it like this.” 「時々、私の発音が間違っていると訂正されて、(アメリカ英語で) このように言いなさいと(日本人教師に)言われたことがあった」これはトリニダード・トバゴ出身のALT³の私信による証言である。このことにより、英語教育の現場では多様な英語を受け入れず、アメリカ英語を強要する一部の日本人英語教師がいることの一部がうかがえる。

アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアにとどまらず、世界には多様な英語の母語話者が存在する。グローバル時代の現代、日本の英語教育では、世界の人々とコミュニケーションのできる「グローバル人材」を育成することが求められており、文部科学省(2012)では「グローバル人材」の定義として、①語学力・コミュニケーション能力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感 ③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの3つの要素を挙げている。コミュニケーションの対象は、母語話者、非母語話者を問わず英語をコミュニケーションの手段として話す全ての人を対象である。そのため、英語は世界共通語であり、もはやアメリカ英語を規範にする必要はない。

上記のALTの発言から、英語教育の現場において、多様な英語を受け入れずアメリカ英語を規範とし、多様な英語を母語とするALTにアメリカ英語を強要する一部の日本人英語教師が存在することは、グローバル化の時代の流れに逆らうことと考える。

¹ 和洋女子大学人文科学研究科英語文学専攻修士課程1年

² 和洋女子大学国際学部英語コミュニケーション学科、大学院人文科学研究科英語文学専攻

³ Assistant Language Teacherの略で、外国語を母国語とする外国語指導助手のことをいう。小学校や中学校・高等学校に児童・生徒の英語発音や国際理解教育の向上を目的に各教育委員会から学校に配置され、授業を補助している。

1.2 世界の英語

世界で最も話されている言語として、英語話者の人口は約 14.6 億人（そのうち英語母語話者は約 4 億人）とされる。そして、中国語（約 11.4 億人）とヒンディー語（約 6.1 億人）の話者の人口が、英語に続いている⁴。

インド人の言語学者 Kachru（1985）は、世界諸英語（World Englishes）という考えを提唱し、世界で話されている英語を 3 つの同心円を用いて分類した（図 1）。内円（Inner Circle）には英語を第一言語（ENL）（英語を母語とする）国、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの 5 か国が入り、森住（2020）ではこの 5 か国を「狭義の英語圏」と呼んだ。外心円（Outer Circle）は、英語が公用語（準公用語）・第二外国語（ESL）として話されている国で、バングラデッシュ、ガーナ、インドなどが入り、森住（2020）では「広義の英語圏」と呼び、「クレオール英語を使っているトリニダード・トバゴなどカリブ海沿岸の国々も含まれる」（p. 244）と述べている。そして拡大円（Expanding Circle）には、英語を使用するが外国語であり、コミュニケーションの手段として使用する中国、韓国、日本などが含まれる。Jenkins（2014）は、英語を母語とする内円の L1 Speakers は、3.3 億人であり、英語を公用語・準公用語等とする L2 Speakers は 4.3 億人であるが、「現在、英語の非母語話者数の数を正確に把握することは不可能」と述べている。

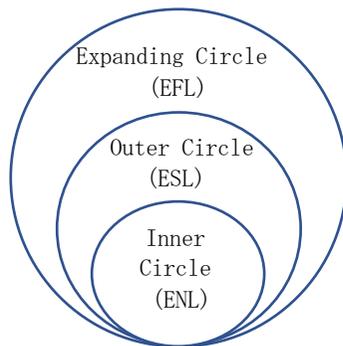


図 1 : Kachru の 3 つの同心円（Kachru, 1985 をもとに筆者作成）

また、イギリス政府は、前述した ALT の母国であるトリニダード・トバゴを「大多数が英語を母語とする諸外国⁵」のひとつとして挙げており、前述の ALT も英語を母語としている。英語は世界のおよそ 58 か国で公用語として話されており、なかでもイギリス政府

⁴ Statista: The most spoken languages world wide in 2023
(<https://www.statista.com/statistics/266808/the-most-spoken-languages-worldwide/>)

⁵ イギリス政府がビザの目的上、英語の知識を証明する必要がない国や地域の出身として挙げた国々 (<https://www.gov.uk/student-visa/knowledge-of-english>)

が英語を母語とする国として以下の国と地域を挙げている；

アンティグア・バーブーダ、オーストラリア、バハマ、バルバドス、ベリーズ、イギリスの海外領土、ドミニカ、グレナダ、ガイアナ、アイルランド、ジャマイカ、マルタ、ニュージーランド、セントクリストファー・ネイビス、セントルシア、セントビンセントおよびグレナディーン諸島、トリニダード・トバゴ、イギリス、アメリカ合衆国、カナダ

1.3 言語観

英語教育の現場に立つ英語教師の言語観（英語観）は学生、生徒に大きな影響を与えるものである。森住（2022, p. 73）は言語観を「英語の知識や能力を使う際の観点・態度」と定義している。そして言語観について、下記のように述べている。

言語観とは「言語に優劣をつけてはいけない、言語によって使う人を差別してはいけない」など言語の使用の際の態度や判断力である。（中略）英語教育に関係させて言えば、英語を知らないと国際人ではないと勝手に考えてしまったり、現代の *Englishes* の時代にあって特定の国の人たちの英語の文法や発音を間違いだと決めつけたりする。（中略）英語を学習しても偏った異文化理解間を植え付けてしまっている。はては、英語を学習してきた当の日本人自身に「英語を習っても役に立たない」などの短絡的な気持ちにさせてしまう。これらはすべて英語教育であるべき言語観を教えてこなかったからである。（森住, 2022, p. 27）

英語の呼称には、「国際補助語としての英語（EIAL）」、「国際語としての英語（EIL）」（Smith, 1983）、「グローバルイングリッシュ（EGL）」（Crystal, 1997）、「共通語としての英語（ELF）」などが挙げられるが、森住（2020）は「英語を『世界語』、『国際語』あるいは『地球語』とするのは、英語の *power* をあまりにも強く感じさせる」（p. 228）と述べている。また、Jenkins らの *Lingua Franca*（共通語）は他の2つよりも断定調ではないと述べている。共通語としての英語である *Lingua Franca* は、言語や文化を共有しない人々同士がコミュニケーションを図る際に使用される英語と定義し、英語が使用されているコミュニケーションでは英語を母語としない人々も英語使用者として認められるべきだとの主張が近年は多く見受けられる（齋藤, 2022, p. 26）。

このように英語は世界の英語として幅広く使われ、今では英語を母語としない英語使用者同士がコミュニケーションをはかる際の共通言語となっているにもかかわらず、アメリカ英語を規範とする一部の日本人英語教師がなぜ存在するのか。その問題の要因の一端を明らかにするため、本研究では、英語教員を目指す学生が大学教育、および英語科教職課程で、アメリカ英語に偏った教育が行われているのではないかという予測をたて、以下の

研究目的を設定した。

1.4 研究の目的

上記の問題意識に基づき、本研究の目的として以下の3つを設定する。

- (1) 英語教職課程を履修する大学生が学ぶ英語圏の範囲を明らかにする
- (2) 英語教職課程を履修する大学生の英語の多様性に対する意識を明らかにする
- (3) 英語教職課程においてどのような英語観を身につけていくかを明らかにする

1.5 研究の方法

本研究では、首都圏にある女子大学の2021年から2023年度の3年分の英語科教職課程を履修する2年生と3年生の学生を対象にアンケート調査を行った。2021年度の2年生と2022年度の3年生は、多少の人数の減少はあるが、同じ学生を対象に調査を行った。2022年度の2年生と2023年度の3年生も同様に、同じ学生を対象に調査を行い、同じ学生の2年生時と3年生時の追跡調査を行った(表1)。またこの研究では、上記の研究の目的にある英語圏、英語観などの意識の変化を検証した。2021年度の第1回調査は無記名形式のアンケートだったが、2022年度の第2回調査と2023年度の第3回調査は記名形式で行った。これにより、2022年度の2年生と2023年度の3年生に関しては、同一人物間での意識の変化の追跡調査が可能になった。その為、2021年度の2年生と2022年度の3年生の比較では、全体的な回答の傾向の分析や、質問項目間の相関関係の分析のみが可能であった。一方で、2022年度の2年生と2023年度の3年生の結果の比較では、同じ質問項目の回答の差を、対応のあるt検定で比較をしたり、2年時と3年時で回答に大きく変化がみられた学生には、個別でインタビュー調査を実施できた。

表1：入学年とアンケート調査年度時の学年の対応表

	第1回調査 2021年度	第2回調査 2022年度	第3回調査 2023年度
2022年入学生			2年生
2021年入学生		2年生 →	3年生
2020年入学生	2年生 →	3年生	
2019年入学生	3年生		

2 2021 年度第 1 回目アンケート調査（川崎, 2022）

川崎（2022）では、1.4 で設定した本研究の目的を達成するため、首都圏にある女子大学の英語科教職課程を履修する大学生 2 年生と 3 年生を対象に、2021 年度に第 1 回目のアンケート調査を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) 学生の考える主な英語圏はアメリカ・イギリス・オーストラリアが中心であった
- (2) 世界の多様な英語を *Lingua Franca*（共通語）と捉え、自ら英語で授業を行うことを重要と考えていた
- (3) 大学の学びから、世界の多様な英語があることを認識しながらも、英語圏の範囲は「狭義の英語圏」（森住, 2020）の範囲であった

この研究では、英語科教職課程を履修する大学生の英語の多様性に対する意識/態度を明らかにするため、英語科教職課程を履修する大学 2 年生および 3 年生（各学年 13 名）を対象にアンケート調査を行い、大学生の英語の多様性に対する意識および態度を統計的に検証した結果、協力者のイメージする英語圏は各学年とも上位 3 位がアメリカ・イギリス・オーストラリアであった。

学生の英語教員としての英語観に関しては、工藤他（2018）を参考に質問事項を作成した。「自分が英語でコミュニケーションを行う上で、英語の母語話者と非母語話者に通じる発音と聞き取りの重要度」と「自分が英語教員として英語力の養成の意識と、英語で授業を行うことの重要性、多様な英語に関する意識」についてアンケート調査を行い、5 件法で回答してもらった。協力者のアンケート調査の回答を集計して、質問項目同士の相関関係を分析したところ、学生は世界の多様な英語を認識し、将来の英語教員として自ら「授業を英語で行う」ことには前向きであることが分かった。しかし、2 年生の協力者から「英語の母語話者の発音を重要」と考え、「自分が英語を使って授業を行う必要がない」と考えている学生もいることが分かった。また、3 年生の協力者にも、「英語の母語話者に通じる発音を重要」と考えている学生が「英語で授業を行うこと」を重要でないと考えているケースが存在し、英語のコミュニケーションの対象は母語話者を意識していることがうかがえた。

川崎（2022）の 2021 年度の調査では、単年の調査であったため、2 年生から 3 年生へ学年が上がることで、大学や大学外での学びから、どのように英語観が変化していくのかを調査することができなかった。そのため本研究は、同じ項目のアンケート調査を 2022 年度と 2023 年度に行い、2 年生から 3 年生の意識の変化を追跡調査し、検証する。

3 英語観の変化に関する追跡調査

3.1 2022 年度、2023 年度のアンケート調査

本研究では、1.4 で設定した研究の目的を明らかにするため、2021 年度に行ったアンケート調査を、2022 年度および 2023 年度に引き続き実施した。2021 年度では無記名で実施したが、2022 年度および 2023 年度は Q0 で記名してもらった。それ以外の質問事項は 2021 年度と同様に、Q1 では学生の属性（学年）を問い、Q2 では、協力者のイメージする英語圏を調査するため、「英語」ときいてイメージする国や地域の名称をできるだけ多く挙げてもらった。Q3 と Q4 では協力者が、大学生になってあら街中で外国人と英語で話した経験の有無を問い、ある場合は、その相手が母語話者／非母語話者かどうか問い、その理由も尋ねた。Q5 と Q6 では、協力者の英語教員としての英語観を調査する目的で、Q5 では英語でコミュニケーションを行う上で英語の母語話者と非母語話者に通じる発音と聞き取りの重要度を質問した。Q6 では、英語教員として生徒への英語力の要請の意識と自分が英語で授業を行うことの重要性和、多様な英語に関する意識について尋ねた。Q5 と Q6 の質問項目は表 2 に示す。実際に使用したアンケート紙とアンケート項目の詳細は付録に掲載する。

本研究の目的（再掲）

- (1) 英語教職課程を履修する大学生が学ぶ英語圏の範囲を明らかにする
- (2) 英語教職課程を履修する大学生の英語の多様性に対する意識を明らかにする
- (3) 英語教職課程においてどのような英語観を身につけていくかを明らかにする

3.2 アンケートの実施時期と調査対象者

調査対象者は、川崎（2022）の調査（第 1 回目）と同じ、首都圏にある同女子大学の英語科教職課程を履修する大学生 2 年生と 3 年生を対象に行った。2022 年度のアンケート調査は 2022 年 12 月に実施し、2 年生は 9 名、3 年生は 8 名であった。また、2023 年度の調査時期は、2023 年 11 月～12 月であり、2 年生 6 名、および 3 年生 8 名には任意で参加をしてもらい、有償で調査を行なった。協力者には、まず研究内容説明書を提示して説明を行い、調査参加同意書に署名をしてもらった。2022 年度および 2023 年度は記名形式とした。

2022 年度の 3 年生は、前回の 2021 年度第 1 回目のアンケート調査に参加した学生が含まれる。2021 年度 2 年生時は 13 名が調査協力をしてくれたが、2022 年度 3 年生時は、欠席や 3 年時に英語科教職課程を履修しないなどの理由で協力者は 8 名であった。2023 年

度も引き続き、本研究の目的を明らかにするため、2021年度、2022年度に使用したアンケート項目で調査を行った。2022年度からは回答を記名式で行った。

2023年の3年生は、2022年の2年生時にもアンケート調査の協力者であり、記名式にしたため回答の対応が可能となった。そのため、2年時と3年時で回答に大きく変化がみられた学生4名にインタビュー調査も行った。

3.3 英語圏ときいてイメージする国や地域 (Q2)

学生の「英語圏ときいてイメージする国や地域」は、2022年度第2回目アンケート調査の2年生時と2023年度第3回目アンケート調査の3年生時では、1位から4位までは変わらず、アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダの順に国名が挙がった。2年生時では、上位4か国に続き、フィリピン、インド、中国が挙がったが、3年生時には上位4位4か国の次に、ニュージーランド、フィリピン、インド、インドネシアが挙がった。また、2年生時には1人平均2.8か国に対し、3年生時には1人平均3.1か国とわずかながら、学生のイメージする英語圏の範囲は広がりを示した。

2023年度の2年生がイメージする英語圏は、1位がアメリカとイギリスの2か国で、参加者全員(6名)が国名を挙げていた。2位がオーストラリア(4名)、3位はカナダ、シンガポール、フィリピンの同数(3名)、続いてマレーシア、香港、インドネシア、パキスタン、マルタ、スイスの国名が挙げられた。2023年度の3年生も上位4か国はアメリカ(8名)、イギリス(8名)、カナダ(5名)、オーストラリア(5名)で、続いてニュージーランド、シンガポールが各2名、そして、マレーシア、フィリピンの国名が挙がっていた。

2021年から2023年まで継続して学生のイメージする英語圏を調査した結果、ひとり当たりのイメージした国数の平均は、2021年度の2年生(3か国)、3年生(3.3か国)、2022年度の2年生(3.3か国)、3年生(3.3か国)、2023年度の2年生(5.2か国)、3年生(4か国)であった。また、2020年入学生の2年時と3年時を比較すると、3か国から3.3か国へ、2021年度入学生は、3.3か国から4か国へ、2年時から3年時へ上がるにつれイメージする英語圏が若干広がったといえる。また、2022年度入学生は、2023年度2年生時でひとり当たりの平均が5.2か国と2020年度、2021年度の入学生と比較すると、2年生時の時点での英語圏のイメージは大きいといえる。これは、コロナの規制が緩和され、学生は徐々に語学留学などで海外にでる機会が増えたり、アルバイトなどの際に、国内でも英語の母語話者だけではなく、様々な母語を持つ英語の非母語話者との接触が増加し、英語でコミュニケーションをとる機会が増えてきたりしたことが要因になっていると推察できる。実際に国土交通省観光庁(2023)によると、2020年から2022年は、以前に比べ

て訪日外国人旅行者数、出国日本人数はその前の年に比べて激減していた時期だった。社会情勢と学生の英語接触の機会の関係なども注目したい。

しかし、全体的な傾向としては、2021年度から2023年度の3年間に渡る英語科教職課程を履修する大学生2年生と3年生を対象に調査を通して、学生の考える英語圏の範囲は、若干の広がりを見せたものの大きな広がりはなく、主な英語圏はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアと「狭義の英語圏」(森住, 2020)の範囲に留まっていた。

3.4 学生の英語教員としての英語観 (Q5 & Q6)

まず、学生の英語教員としての英語観を追跡するため、以下の表2のような、9問の質問を行った。Q5は、自分が英語でコミュニケーションを行う際、英語の母語話者と非母語話者に通じる発音と聞き取りがどれだけ重要だと思っているか。Q6では、将来、英語教員として生徒に英語を教える際の英語の養成の意識と、自分が英語で授業を行うことの重要度、そして多様な英語に関する意識について質問した。これらの質問項目は、工藤他(2018)を参考に作成した。以下では、これらの質問項目間の相関関係を分析するためにピアソンの相関係数分析を行った。以下ではピアソンの相関係数 $r=0.5$ 以上のものを報告する。

表2：Q5とQ6の質問事項

<p>5. あなたが英語でコミュニケーションを行う際に以下の項目をどのくらい重要だと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none">5.1 英語の母語話者に通じる発音であること。5.2 英語の非母語話者に通じる発音であること。5.3 母語話者の発音を聞き取れること。5.4 非母語話者の発音を聞き取れること。
<p>6. あなたが英語教員として英語を教える際、以下はどのくらい重要だと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none">6.1 母語話者と意思疎通が図れるような英語力を養成すること。6.2 非母語話者と意思疎通が図れるような英語力を養成すること。6.3 自分自身(教師)が英語で授業を行うこと。6.4 世界には多様な英語があるということを教えること。6.5 生徒にアメリカ英語を教えること。

2021年度2年生時と2022年度3年生時の回答で相関分析を行った。その結果、2年生時で負の相関関係がみられた項目で、3年生時には強い正の相関関係がみられた。2年生時に負の相関関係がみられたのは、5.1と6.3の項目でピアソンの相関係数($r=-0.66$)あ

ったのに対し、3年生時では同じ項目でピアソンの相関係数 ($r=0.82$) と強い正の相関関係が示された。

また、2022年度3年時のアンケート結果から、5.2と6.4にピアソンの相関係数 ($r=1.00$) と強い相関関係がみられ、これらの項目(5.2と6.4)には2021年度の3年生にもピアソンの相関係数 ($r=0.61$) と強めの相関関係がみられ(川崎, 2022)、2021年度、2022年度の3年生に共通する相関関係が示された項目であった。

次に2022年度2年生時と2023年度3年生時の回答でも相関分析を行った。2022年度の2年生時では、Q5.4とQ6.5の1項目に負の相関関係が示された ($r=-0.56$)。一方、2023年3年生はQ5.1とQ6.1 ($r=0.74$)、およびQ5.3とQ6.1 ($r=0.68$) の2項目に比較的強い相関関係が示された。

2023年度の3年生で、相関関係が示されたのは、「母語話者に通じる発音」もしくは「母語話者の発音を聞き取れること」が、いずれも「母語話者と意思疎通が図れるような英語力を養成すること」と相関があるという結果であった。これにより、2023年度の3年生には「母語話者」信仰が強い傾向がある学生が一定数いることが改めて確認された。

2021年度の2年生時と2022年度の3年生時では、Q5.1とQ6.3の同項目間で負の相関関係(2年生時)から強い正の相関関係への変化が示されたが、これは2年生時では母語話者の発音を重視している学生は、自分が英語教師として英語の授業を行うことには積極的ではないのに対し、3年生時では、母語話者の発音を重視している学生ほど、教師として英語で授業を行うことに前向きになったと考えられる。

また、2021年度と2022年度の3年生に共通して正の相関が認められたQ5.2とQ6.4の項目から、3年生になり英語をLingua Franca(共通語)として捉えるようになった学生は、教師として世界の多様な英語を教えることが重要であると考えられるようになったと言えるのではないか。

2022年2年生に関して、Q5.4とQ6.5に負の相関関係が示されたが、非母語話者の発音を聞き取れることを重視している学生ほど、アメリカ英語を重視していないと考えられる。

これらの結果から、英語をLingua Franca(共通語)として捉えるようになった学生は、教師として世界の多様な英語を教えることが重要であるとする学生と、「母語話者」信仰が強く、特にアメリカ英語を重視している学生の双方がいることが明らかとなった。

3.5 2年生から3年生への変化

川崎(2022)の2021年度第1回調査では、アンケート紙の質問項目、Q5「自分が英語でコミュニケーションを行う上で、英語の母語話者と非母語話者に通じる発音と聞き取りの重要度」とQ6「自分が英語教員として英語力の養成の意識と、英語で授業を行うこと

の重要性、多様な英語に関する意識」に関しての調査を行い、調査協力者の回答から相関関係を明らかにした。また、2022年度の第2回目の追跡調査により、記名式のアンケートとしたことで同一学生内での意識の変化の追跡調査が可能となり、2年生時と3年生時の学生の英語観の比較を行った。アンケート調査での2021年入学生の2年生時と3年生時のQ5とQ6の回答は以下の表3.1と表3.2の通りである。

2023年度の第3回目のアンケート調査では、2021年入学生の2022年度2年生時と3年生時に記名式で行った。Q5とQ6の回答をデータ化し、2年生時と4年生時の差について対応のあるt検定を行ったところ、Q5.4に関して3年生時（平均値3.63）は2年生時（平均値4.50）に比べ、有意に点数が下がったことが確認された（ $t=3.86, p=0.01$ ）。

また、Q6.5に関しては、2年生時（平均値3.63）から3年生時（平均値3.00）では、統計的には有意な差（ $t=1.49, p=0.18$ ）はなかったが、数値的には比較的大きな差がみられた。それ以外の質問項目に関しては、数値的にも統計的に差はみられなかった。

表 3.1 : Q5.1–Q5.4 2022年度2年生時と2023年度3年生時の記述統計 (N=8)

	Q5.1		Q5.2		Q5.3		Q5.4	
	2年生時	3年生時	2年生時	3年生時	2年生時	3年生時	2年生時	3年生時
平均値	4.00	3.88	3.75	3.25	4.50	4.25	4.50	3.63
標準偏差	1.07	1.36	1.04	1.04	0.53	0.71	0.53	0.52

表 3.2 : Q6.1–Q6.5 2022年度2年生時と2023年度3年生時の記述統計 (N=8)

	Q6.1		Q6.2		Q6.3		Q6.4		Q6.5	
	2年生時	3年生時								
平均値	4.75	4.63	4.38	4.25	4.75	4.38	4.25	4.63	3.63	3.00
標準偏差	0.46	0.52	0.52	0.46	0.46	0.74	0.71	0.52	0.74	1.20

Q5.4に関して2年生から3年生なり、非母語話者の発音を聞き取れることの重要度が下がったことは、英語の発音の多様性を知ること、非母語話者の多様な発音を全て聞き取れる必要はないという意識が生じたのではないかと考えられる。

Q6.5では、教師として、アメリカ英語を教えることの重要度が低くなったことが明らかになった。これは、世界の多様な英語を知り、必ずしもアメリカ英語を基準とする必要がないと考える学生が増えたことが示唆される。

4 インタビュー調査の結果

2021年入学生を対象とした、2022年度の第2回目のアンケート調査と2023年度の第3回目アンケート調査は、記名式で行ったため、2022年度2年生時と2023年度3年生時の調査協力者として対応のあるデータを取ることができた。

4.1 インタビュー調査実施方法

4.1.1 インタビュー調査時期とインタビュー協力者

個別での英語観の意識変化についてのインタビューは、アンケート調査が行われた(2023年11月中旬)後、筆者が集計を行い、各質問事項で2年生時と3年生時の回答を比較し、大きく差が確認された協力者、あるいは他の協力者と異なる回答をした協力者を対象に任意で有償での協力をお願いした。2023年度3年生の協力者から4名を選び、アンケート調査後(2023年12月上旬)にインタビューを各自個別に行った。インタビュー調査を行った4名の2年生時と3年生時のQ5とQ6の回答の変化は以下の表4.1と表4.2の通りである。

表 4.1 : Q5.1-Q5.4 2022 年生年度 2 年生時と 2023 年度 3 年生時のインタビュー協力者の回答

協力者	Q5.1		Q5.2		Q5.3		Q5.4	
	2 年生時	3 年生時						
A さん	2	5	2	4	5	5	5	4
U さん	4	3	4	3	4	4	5	3
M さん	4	4	3	3	4	4	4	3
K さん	5	1	5	1	4	3	4	3

表 4.2 : Q6.1-Q6.5 2022 年生年度 2 年生時と 2023 年度 3 年生時のインタビュー協力者の回答

協力者	Q6.1		Q6.2		Q6.3		Q6.4		Q6.5	
	2 年生時	3 年生時								
A さん	5	5	5	4	4	5	5	5	3	2
U さん	4	4	4	4	5	4	5	4	3	1
M さん	5	5	4	5	5	4	4	4	5	4
K さん	5	4	5	4	5	5	5	5	3	4

4.1.2 インタビュー調査の手順

インタビューは各協力者個別で行い、調査協力者には、まず、研究内容説明書を提示して説明を行い、調査参加同意書に署名をしてもらった。アンケート調査の2年生時（2022年度）と3年生時（2023年度）の本人のアンケート紙の回答を示して、アンケート調査の回答に至る要因などを尋ね、思いつくことを語ってもらった。インタビューの時間は1人10分以内とした。インタビュー調査の記録は、筆者のスマートフォン録音機能を使用し、その後、音声データを文字化した。

4.2 インタビューデータのテキスト分析

4.2.1 テキスト分析の概要

インタビュー調査のデータを文字化し、インタビュー協力者4名分の文字化データを合わせてメモ帳に移し、テキスト解析用のソフトウェアであるKH Coder（樋口, 2020）でテキスト分析を行った。最初に抽出語リストを作成し、インタビューデータの中で、使用頻度の高い単語の出現頻度を分析した。次に共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワーク分析を行うことにより、インタビューデータの回答に出てくる単語同士のつながりを可視化することができる。単語同士が強く結びついた部分に自動的にグループと色分けをしてくれることで、単語の出現頻度や共起数の多さが明確になり、回答を客観的な指標で分類することが可能となる。

4.3.1 データの抽出語

インタビュー調査協力者4名の文字化データの抽出語数は2,893語で、497の異なる単語、合計163文であった。まず、回答にみられた単語から品詞ごとに頻度情報を抽出する分析を行った。抽出語分析では、感動詞や「今」のような副詞は削除した。その結果、名詞では「英語」が一番頻度が高く、64語であった（図2）。国名（上位10か国）では、アメリカが一番多く43語、イギリス17語、カナダ5語が上位3か国であった（図3）。

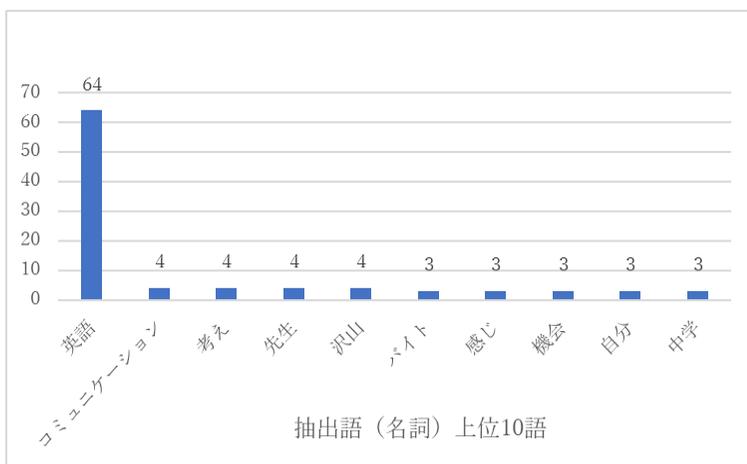


図2：インタビューデータからの抽出語（名詞）上位10語

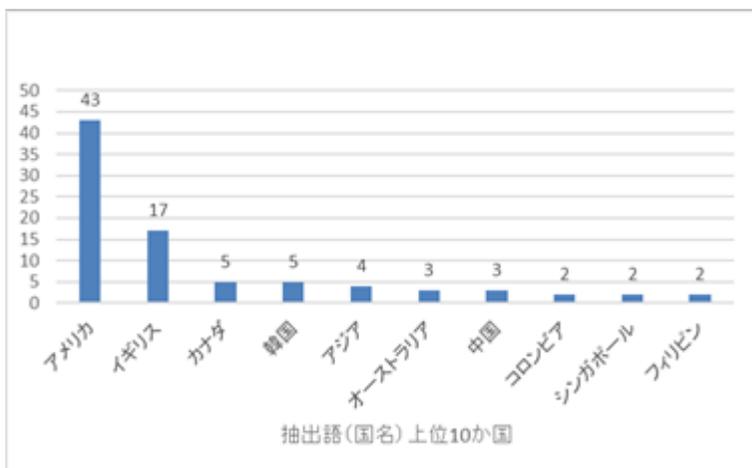


図3：インタビューデータからの抽出語（国名）上位10か国

4.3.2 共起ネットワーク分析

4名分のインタビューデータを文字化し、KH Coder を使用し共起ネットワークを作成した。福井・阿部（2013）は、共起ネットワークを「共起ネットワーク図とは、テキストデータ内に置いて出現頻度の高い語のうち、出現パターンの類似した後、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク図であり、強い共起関係ほど太い線で、出現回数の多い語ほど大きい円で表現したものである」（p. 4）と説明している。

抽出語リストから、共起ネットワーク分析を行ったところ、2年生から3年生で変化がみられた学生の要因から、6つの島が形成された（図4）。

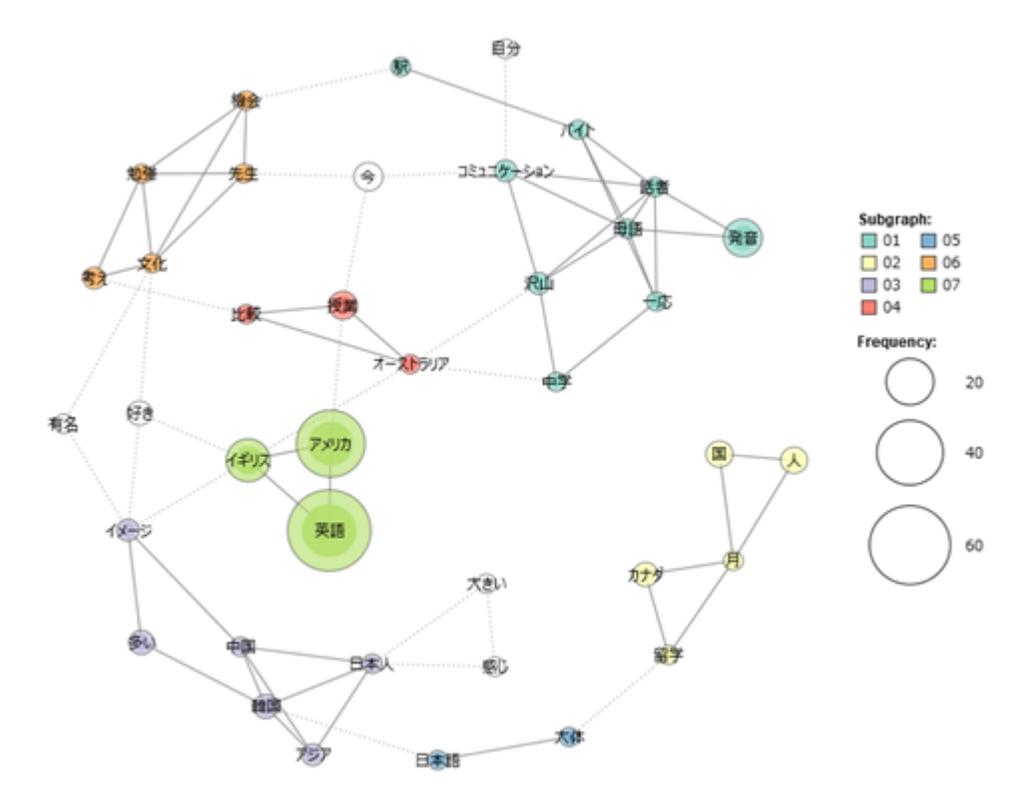


図4：抽出語リストから形成された共起ネットワーク図

4.3.3 「アメリカ・イギリス・英語」の島

共起ネットワーク分析の結果、最も頻度情報の大きな島を形成したのは、図4中央の黄緑色の「英語」、「アメリカ」、「イギリス」からなるグループだった。これは、協力者の大半が「アメリカ英語」と「イギリス英語」という対比の中で英語観を捉えているという傾向を示すものであった。

4人の協力者のうち3人は、アメリカ英語とイギリス英語のどちらかを重視していたり、どちらかへの好みを持っていることがうかがえた。

3人のうち2人はアメリカ英語を重視している傾向があることが分かった。Uさんは、アメリカは行ったことがないが、「行ってみたい国」として挙げていた。一方で、「イギリスに行きたい意欲はあまりない」と語った。英語に関しては、「アメリカ英語とイギリス英語ってあるじゃないですか。私たちが習ってきたのって、アメリカ英語、一番イメージ

つくのは、アメリカです」とアメリカ英語を「英語の中心」としてとらえている様子が見受けられた。また、将来の英語教師としての意識として、「主流はアメリカ英語だから、教えるってなったら、アメリカ英語の方が大事かなって、共通言語じゃないですか。英語って。日本人はだいたいアメリカ英語を教わってるから、アメリカ英語を話す…だから、イギリス英語を教えるより、アメリカ英語を教える方が大事かな、って思います。」とアメリカ英語を教えることを重要とと思っている意識も明らかになった。

またMさんは、英語と聞いて、すぐに頭に思い浮かぶのは、「アメリカ」とのことだったとしている。そして、「アメリカ現地で、英語を発音するときに、すぐ、理解してもらえるように、発音することが、大事」と、やはり、アメリカ英語が重要で、アメリカ英語の発音を身に付けるべきであるという考えを述べた。

一方でイギリス英語への好みから、イギリス英語を重視している回答も1名あった。Aさんは、アンケート調査で、Q5.1「英語の母語話者に通じる発音」の重要度とQ5.2「英語の非母語話者に通じる発音」の重要度において、2年生時と3年生時では比較的大きな差がみられ、両項目の重要度の認識が向上したことが分かった。これは、おそらくAさんが2年時と3年時の間にイギリスへ（1か月ほど）留学した経験が関連しているように思われる。Aさんはアメリカよりイギリスが好みだと語り、イギリス英語のイメージについても「イギリス（英語）の方が、…上品っていうか、なんか丁寧な言い回しが多い。そういう感じです」と、肯定的な意見を述べた。また、Aさんは、イギリス留学で、色々な人たちとコミュニケーションを取るうえで、発音が大切だという認識が強まった一方、イギリス英語を「正しい発音」と認識していたことがうかがえた。

これら、アメリカ英語かイギリス英語のどちらかを重視しているという回答の他に、世界の多様な英語への知識の増加から、必ずしもどこかの国の発音に近づける必要はないという考えが大きくなったことを示唆するような回答をした被験者もみられた。Kさんの場合、Q5.1とQ5.2に一番大きな変化がみられ、2年生時と3年生時では、Q5.1「英語の母語話者に通じる発音」とQ5.2「英語の非母語話者に通じる発音」のどちらの問いにも「とても重要だと思う」から「まったく重要だと思わない」へ変化がみられた。Kさんは、2年生の後期ごろから「オンライン英会話」を始めたが、講師は母語話者に加えて、フィリピンや南米など、非母語話者もいたとのことだった。また、3年生になる春休みにカナダへ語学留学をした経験を持ち、その中で多様な英語に触れることによって英語観が変化したことがうかがえた。

4.3.4 「中国・韓国・アジア」の島

共起ネットワーク分析の結果、図4下部の薄紫色の「中国」、「韓国」、「アジア」、「日本人」、「イメージ」、「多い」などからなるグループだった。これは、協力者の中には、留学先やアルバイト先で、非英語母語話者である中国語話者や韓国語話者と接している中で、今までの教育で習ってきたアメリカ、イギリス英語以外の英語に触れる機会から、英語がLingua Franca（共通語）であることの意識が深まったことを示すものであった。

Kさんがカナダ留学をした際、同じ語学学校で学んだのが、韓国、中国、アジアの留学生が多かったが、コロンビア、ブラジルなど南米からの留学生と英語を学び、「そのいろんな国の一緒に英語を学んでいる人たちと、一緒に生活したうえで、別に、発音は重要ではあるけど、色んなイントネーションとか、アクセントがあっても、英語は通じるんだな、ということ学んだ」と語った。これは、英語の非母語話者とのコミュニケーションを通して、英語がLingua Franca（共通語）であることの意識が深まったと考えられる。

MさんとUさんは、アルバイトで外国人と接する機会も多いとのことだったが、中国人、韓国人、タイ人などアジア系の観光客と会話する機会があるが、相手が日本語が話せる場合は、日本語で、日本語が話せない場合は英語で会話するとのことだった。Mさん、Uさんに関しても、日本国内でのアルバイトを通して、アジア圏の観光客と英語で会話することで、Lingua Franca（共通語）の意識を深めていると考えられる。

4.3.5 「先生・勉強・文化・考え」の島

共起ネットワーク分析の結果、図4左上のオレンジ色の「先生」、「勉強」、「文化」、「考え」、「機会」などからなるグループだった。これは、協力者が現在受講している授業の内容の影響で、アメリカ英語への関心が高まったり、逆に世界の多様な英語への理解が深まったりしたことを示すものであった。

Kさんは、大学でアメリカ人の先生から「アメリカの文化と社会」という講義を受けているとのことだった。「その授業で、結構アメリカについて、ことばとか、勉強する機会が増えて。…授業でアメリカについて学ぶことが増えた」ことで、もともとディズニー映画を見たりしていたが、授業の影響でアメリカの英語やアメリカ文化への憧れが深まった様子がうかがえた。

Aさんの場合は、大学で「ことばと社会」という授業で、「世界にはアメリカ英語だけではなく、沢山の英語がある」こと先生から教えられ、「…だから、アメリカ英語ももちろん重要だとは思いますが、沢山の英語、を知るべきだと思います」と、世界の多様な英語について学び、アメリカ英語だけではなく、多様な英語を知るべきだという考えに至った。

4.3.6 「母語・発音・コミュニケーション・バイト」の島

共起ネットワーク分析の結果、図4右上の水色の「発音」、「コミュニケーション」、「母語」、「話者」、「バイト」などからなるグループだった。これは、ある一人の協力者が、アルバイトの中で多くの観光客と英語で話し、コミュニケーションのためには発音よりも伝わることを重視するようになったという意識の変化についての回答が表れていると考えられる。

実際にMさんは、駅でのアルバイトを通して外国人観光客と接している。観光客は、英語圏やアジア系で「発音、っていうか、伝わればいいかな」と、英語の母語話者非母語話者との会話では、発音よりコミュニケーションを重視していた。しかしながら、教師として英語を教える際にはアメリカ英語が比較的重要と考えていた。

4.3.7 「オーストラリア・授業・比較」の島

共起ネットワーク分析の結果、図4中央の赤色の「オーストラリア」、「授業」、「比較」などからなるグループだった。これは、ある一人の協力者が、授業の影響で世界の多様な英語への理解が深まったことを示すものであった。

Aさんは、2年生から3年生になりアメリカ英語の重要性が低くなった。その理由として、「授業とかでも、こういう、なんていうか、それぞれの比較？同じ言葉で、オーストラリア英語、イギリス英語、アメリカ英語、で一斉に比較したなかで、こんなに違うんだっていうことを知ったのも強い」と述べた。

4.3.8 「カナダ・留学・国」の島

共起ネットワーク分析の結果、図4右側の黄色の「カナダ」、「留学」、「国」、「人」などからなるグループだった。これは、ある一人の協力者が、カナダへの留学の影響で世界の多様な英語への理解が深まったことやボキャブラリーの重要性を示すものであった。

Kさんは、カナダ留学で様々な国の人と出会った。「ホームステイ先はフィリピンの方で、クラスの方は、コロンビア、ブラジル、フィジー、本当にいろいろでしたね」と語った。また、中学の時に家族とシンガポールに住んだ経験がある。そして、英語でコミュニケーションをとる際に必要だと思うことを次のように語った。「相手の言いたいことを知るときに、文法も大事なんですけど、単語数を知れば知るほど、自分が話せること、相手から聞き取れることも増える、って今思っている」と、文法や発音以上にボキャブラリーが大切だと考えていることが分かった。

5 おわりに

5.1 結論

本研究は、日本の英語教育の現場でアメリカ英語を規範とする教師の存在を問題視し、その要因を明らかにするため、英語科教職課程を履修する大学生の（1）イメージする英語圏の範囲（2）英語の多様性に対する意識、（3）大学生活でどのような英語観を身につけていくかを研究の目的に設定した。

その結果、2021年の第1回目調査から2023年の第3回目調査を通して、2年生から3年生にかけて、学生の考える英語圏の範囲はわずかではあるが拡大を見せていたが、大きな変化はみられなかった。英語の多様性に対する意識は、大学内での学び、およびアルバイトや海外留学を通して、世界の英語の多様性に関しての理解が深まったことが明らかになった。そして、英語はアメリカ英語やイギリス英語のみならず、世界の共通語として多様な英語が存在することを認識し、母語話者の英語にとらわれないという考えをもつようになった学生がいる一方で、今なお「母語話者信仰」が強く、特にアメリカ英語やイギリス英語への憧れが強く、基準と考えている学生が存在していることも明らかとなった。また、学生は世界の多様な英語を知ること、非母語話者の発音が聞き取れないことも受け入れられるようになり、自分が英語で授業を行うことに前向きになったと考えられる。2年生から3年生にかけて回答に変化があった学生へのインタビュー調査を行った結果、学生は授業や留学など様々な場面で英語の多様性を学んだが、この学びは必ずしも全員が母語話者信仰やアメリカ英語を基準とする考えを弱めることには結びつかず、逆に一部の学生は、アメリカ英語への憧れが増したり、アメリカ英語を基準とする考えが強くなったりするということにも結び付いていることが示唆された。

この結果は、本研究の問題の所在にも記載した、英語教育の現場においてアメリカ英語を強要する一部の日本人英語教師がいることとも合致する結果であった。現在のグローバル社会での英語観を考えると、本来は英語科教職課程でこのような意識は弱められるべきであり、英語が使用されているコミュニケーションでは英語を母語としない人々も英語使用者として認められるべきだという意識が育てられなければいけない。このような意識を変化させるには、さらに多くの英語の母語話者、非母語話者との接触の機会が必要と考えられる。

5.2 今後の課題

今後の課題として、本研究を継続的に行い、社会情勢の変化に伴い学生の英語観が、大学生生活とともにどのような変化を示すかも注目したい。また、可能であれば、第1回目か

ら第3回目までの調査では、英語科教職課程の2年生と3年生を対象に調査を行ったが、今後は英語科教職課程の1年生と4年生の英語観に関しても、調査を広げ、未来の教師としての英語観の変化を調査したいと考えている。

参考文献

- Crystal, D. (1997). *English as a Global English*. Cambridge University Press.
- Jenkins, J. (2014). *Global Englishes A Resource Book for Students, 3rd Edition*. Routledge.
- Kachru, B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle in Quirk, R. & Widdowson, H. (eds). *English in the World*, Cambridge University Press.
- Smith, L. (1983). *Readings in English as an International Language*. Pergamon Press.
- 大石晴美 (編) (2023) 『World Englishes 入門 グローバルな英語世界への招待』 昭和堂.
- 工藤洋路・鈴木彩子・日基滋之・松本博文 (2018) 「英語科教職課程の学生が習得すべきコンピテンシーの研究とCand-doリスト作成の試み—4年次報告—」, 『論叢 (玉川大学文学部紀要)』 59, pp. 47-70.
- 齋藤浩一 (2022). 「English as a Lingua Franca (EFL) とアイデンティティー—本校生徒を対象とした事例研究—」 『武蔵高等学校中学校紀要』 6, pp. 25-37.
- 樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』 カニシヤ出版.
- 福井美弥・阿部浩和 (2013) 「異なる文体における共起ネットワーク図の図的解釈」 『図学研究』 第47 (4). pp. 3-9.
- 森住衛 (2020) 『日本の英語教育を問い直す8つの異論』 (桜美林大学叢書), 桜美林大学出版会.
- 森住衛 (2022) 「メタ言語能力育成を目指した英語語彙の認知的指導の試み—表層の「諸形式」と深層の「文化的意味」の視点から—」 『Cogvoc Journal』 5, pp. 26-82, 認知科学にもとづく語彙指導研究会.

引用ウェブサイト

- 国土交通省観光庁 (2023). 「訪日外国人旅行者数、出国日本人数の推移」, https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryoutoukei/in_out.html (最終閲覧: 2024年1月31日)
- 文部科学省 (2012). 「グローバル人材の育成について」, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf. (最終閲覧: 2024年1月30日)

付録 アンケート用紙

資料Ⅰ 英語科教職課程を履修する大学生の英語観に関するアンケート

和洋女子大学大学院英語文学専攻 川崎つぶら

アンケート調査の協力に同意していただける場合に、以下ご回答ください。

0. あなたの氏名を記入してください。 _____

1. あなたの学年

- ① 2年生 ② 3年生 ③ その他

2. 「英語」ときいてイメージする国や地域の名称をできるだけ多く挙げて下さい。(複数回答)

3. あなたは大学生になってから街中で外国人と英語で話したことがありますか。

- ① ある (→質問4, へ) ② ない (→質問5, へ)

4. 1 質問3で「ある」と答えた方に伺います。その外国人はどういった方でしたか。

わかる場合は、わかる範囲で地域・国を書いてください。

- ① 英語の母語話者 ()
 ② 英語の非母語話者 ()
 ③ 英語の母語/非母語話者どちらも ()
 ④ よくわからない

4.2 なぜ英語の母語話者/非母語話者とわかりましたか？

5. あなたが英語でコミュニケーションを行う際に以下の項目をどのくらい重要だと思いますか。

- ① まったく重要だと思わない ② あまり重要だと思わない ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかというくらい重要だと思う ⑤ とても重要だと思う

- | | | | | | |
|--------------------------|-------|---|---|---|---|
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 5.1 英語の母語話者に通じる発音であること。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 5.2 英語の非母語話者に通じる発音であること。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 5.3 母語話者の発音を聞き取れること。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 5.4 非母語話者の発音を聞き取れること。 | ----- | | | | |

6. あなたが英語教員として英語を教える際、以下はどのくらい重要だと思いますか。

- ① まったく重要だと思わない ② あまり重要だと思わない ③ どちらとも言えない
 ④ どちらかというくらい重要だと思う ⑤ とても重要だと思う

- | | | | | | |
|----------------------------------|-------|---|---|---|---|
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 6.1 母語話者と意思疎通が図れるような英語力を養成すること。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 6.2 非母語話者と意思疎通が図れるような英語力を養成すること。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 6.3 自分自身(教師)が英語で授業を行うこと。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 6.4 世界には多様な英語があるということを教えること。 | ----- | | | | |
| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
| 6.5 生徒にアメリカ英語を教えること。 | ----- | | | | |

ご協力ありがとうございました。